

母の家出と認知症介護

吉田 泰子

「お母さんが家出した。」

と、突然岐阜にある実家の父からの電話。

「えっ？お母さんが？」 認知症の祖父母を置いていったどこへ？

「大丈夫なの？私手伝いに行こうか？」

「うーん、別に行けることがあるわけじゃないからいいけど。家を空けられないから、パチンコに行けなくて困っとる」(笑)

92歳の祖父欽一、90歳の祖母みね、ともに認知症(要介護2)。排泄や食事は一応自分で出来ているが、数年前より祖父母ともに、物忘れがひどくなった。

実家は岐阜県大垣市、祖父母と父母の4人で暮らしている。母は4人姉妹の長女で、父は婚養子。「長女でなかつたら、本当は東京に住みたかった」と今だに言う母、長女として家を継ぎ自分の父母を介護している。実の親子ということもあってか、母と祖父母の口論・暴言暴行がほぼ毎日。以前より、看護師・ケアマネジャーである私のところへ、嘔み付いた、どづいた(殴った)無視、などこまったものだと父母の愚痴を聞いていた。

今年になってやっと、ケアマネジャーさんからの勧めでデイサービスを利用した。シヨートステイも利用した。祖父は放尿、祖母は帰宅願望が強くシヨートステイは1泊2日で帰宅。今後のご利用については検討させていただきたい」とのこと。

そして、今回祖父のビール飲酒事件をきっかけに言い争いとなり、ついに母の堪忍袋の緒が切れた!!

母が、隣接する小屋の2階へ家出（風呂と食料調達には帰ってくるらしい）。父の話だと小屋の2階で大好きなカラオケの練習をしているとのこと。祖父母は、母の姿がみえないため

「どこ行つた?どこ行つた?」

と泣きながら家の中を捜し歩いている。父は祖父母の介護のため、大好きなパチンコにいけず、困っている。

「土日によかつたら、手伝いに行こうか?」

「まあええわ、なんとかなるで。」

と父は明るい。

しばらくし、父から電話があった。「お母さん帰ってきた。家出は、3日で終わった。これでパチンコにいける。」（と嬉しそう）

母の愚痴を聞こうと電話で話を聞くと。

「念書を書かせて毎朝読ませている。二人とも言うこときかんで腹が立ってしゃあない。じいちゃ

んとばあちゃん東京に送るで、あんためんどうみたって。」

「私は20年後、認知症のお母さんたちを介護しなあかんのやで今は遠慮しとくわ」
「何言うとる、お母さんはぜったい認知症にはならない。」

(祖母・母、顔も性格もそっくり、母が認知症になる確率は結構高いかも：20年後、私も母のよう
うに腹立て娘に愚痴を言っているのかしら???)

今年8月のお盆、岐阜の実家に、私の兄弟3人とその家族が集まった。岐阜市に住む兄家族・
東京に住む私の家族・千葉に住む弟家族、毎年1回実家に集まり近況を話す機会だ。

「もうしゃべらん!」「さわるな!」など以前より母が祖父母に向けた張り紙があちこちに張つ
てある。今年母の家出のときに書かせた念書が食卓の壁にはってあった。

「これからは、我をはりません。うそをつきません。」

平成19年6月28日 欽一(拇印)・みね(拇印)「

(うわゝ、拇印まで押してある。)

祖父母とは私が小学校のときから、高校を卒業するまで一緒にすごした。祖父母は農業を営み、
朝から夜までよく働いていた。そして神仏を大切にしていた。朝夕のお経は欠かさない、今でも
祖父母の残された役割のひとつだ。数年前より、最初耳が遠くなり、徐々に物忘れがひどくなつ
ていった。

今年も1年ぶりに話をする。年々物忘れがひどくなっているのを実感する。孫の私が誰だかわ

からない。

「あんだ、誰やったかいな？」

「孫の泰子やわ」

「あゝ、泰子か。あの子らはあんだの子か？」

「そうや」

「何年生やの？」

「小学校2年生やわ」

「ほゝか、大きくなったな」

(1分後)

「あんだ、誰やったかいな？」

「孫の泰子やわ」(最初に戻る)

これを何回と繰り返す。ドリフターズのコントのよう。

テレビを見ているときも、本を読んでいるときもおかまいなし、同じ質問の繰り返し。5日間しか滞在しない私もさすがに4日目ごろには返事をしない。無視、逃げる、などの方法で質問から逃れた。年々パワーを増している。365日一緒にいるのは、大変だと痛感する。そんな祖母に真剣に説得しようと、怒鳴っている母。

「今言ったでしょ」

「いや、わしゃ聞いておらん」

「ここで今、話していただでしょ（怒）まったくも、何回言ってもわからんのやから」

認知症という病気なんだからと説明してもわかってもらえない。認知症の祖父母が心を改め、母の言うことを聞く素直な老人に今から変わることはまず無いだろう。介護者がいかに対応していくしかないのだが……。そのことを母に説明しても「分かってはいるけれど、怒鳴らずにはいられない。」とのこと。

「私は絶対に認知症なんかにならない」祖母のようにはならないと言いきる母。父いわく、祖母と母と私は口調も性格もそっくり（私はそう思いたくないが……）ということとは……考えるのはよそう。

私の子供のころは、曾祖父も一緒に住んでいた。今思うと曾祖父も認知症だった。一日何度も食事をし、一緒に住んでいる私に「おまはん誰や？」とたずね、時々迷子になって近所の人について帰ってもらっていた。そんな曾祖父に祖母は怒っていた。（今のお母さんのように……）

曾祖父は、転んだのを機に寝たきりとなり、1週間ほどで自宅にて亡くなった。91歳だった。当時私は高校生、親族が大勢集まり曾祖父を囲むようにし、亡くなる瞬間を待っていた。23時ごろもう遅いからと、子供たちは寝るようにいわれ床に入るが、興奮してなかなか眠れずにいるとすぐ亡くなったという知らせが入った。

祖母・母の介護している姿を見ているせい、介護関係の仕事をしているせい、いずれ自分

も母を介護するのだろうと漠然と思っている（もちろん怒鳴りながら）。毎年お盆に集まると義姉・義妹に私が両親の介護をするようになるだろうとそれとなく話をしている。一昔前は介護は長男の嫁が介護をすることが多かった。今はやはり実子、今自分が働いている現場を見ても、実の娘・息子が介護のキーマンとなっていることが多い。義姉義妹はそれぞれの両親の介護をしてあげて欲しいと思う。

さて話は変わって、私の仕事の話になるが、私は今介護の相談の仕事をしている。10年前は「寝たきりにはなりたくない」という声が多かった。今は認知症にだけはなりたくないという声が多くなったような気がする。

厚生労働省の統計、今後の予想を見ると10年後には認知症が今の2倍の人数になるとか、ならないとか。「認知症になりたくない。」私が看護師になったばかりのころ、 ゞ 記名力の低下や判断力の低下は、死に対する恐怖感をなくすための自然の摂理かも ゞ と、先輩看護師が言っていた。家族の誰かが認知症になったとき、介護する人たちが翻弄される。私の母も同じだ。認知症の祖父母を相手に真剣に説得しようとしている。何度説明しても覚えられず同じ質問をする祖父母、説明したように行動しない祖父母に対して腹が立ち怒鳴る。怒鳴られた祖父母も腹が立ち怒鳴り返す。眠れない。体調を崩し一層イライラが募る。イライラしているとちよつとしたことで腹が立ち怒鳴ることとなる。悪循環となる。

認知症の介護は、介護者しだい。介護者がどれだけ柔軟に対応できるかが大切だと思っている。

といえども今では介護者も高齢者、老老介護の時代である。

認知症の老人がふえていると同時に元気な老人も増えている。アンチエイジング、20年前に比べみんな若返っている。20年前の60歳と今の60歳じゃぜんぜん違う。いい化粧品が出来たのか？美容整形が発達したのか？医療が発達したのか？原因は1つ2つではない。日本人はほとんど若返っている。見た目ももちろん行動だって若返っている。20年前のエアロビクス教室ジャズダンス教室には10代20代の人が多かったのに、今は60代70代の人々がいっぱいだ（しかもレオタード、へそだし姿で）。20年前に比べ、高齢者はとても元気、心も体も柔軟だ。

今介護の仕事をしていて心がけていること、それは相談。「一人で悩まず、だれでもいいから相談してください。」高齢者世帯・一人暮らしの多くの人は、今後の生活にたいする不安を抱えている。もし寝たきりになったら…、もし認知症になったら…どうなってしまふのだろう。相談したからといってすべて解決ということはない。ただ無意味な不安は軽減することができる。「一緒に考えましょう。」「大丈夫何とかあります。」試行錯誤を繰り返しながら、将来の見えない不安を軽減してゆきましょう。

介護保険だって私たちが後期高齢者になったときどうなっているかはわからない。でもそこには人がいる。相談が出来る。何らかの方法があるはずだ。人間は強い。